

新型コロナウイルス感染症の影響で、聞法の機会が大きく失われてしまいました。このような時にすこしでも皆様に仏法に触れていただけるよう、紙面1枚程度の短い法話を連載いたします。 小松教務所

「六道」

コロナ禍にあって様々なことを考えさせられました。4月8日花まつりを機縁としてお手紙という形ではありますが、共に仏教の教えを聞いていただければ幸いです。

4月8日はお釈迦さんの誕生日、花まつりですね。小松教区でも昔から、白像を引き誕生仏に甘茶をかけ子供達がゲームをし、楽しい一日です。昨年と本年は残念ながら接触を避ける為に例年のような花まつりはできませんが、コロナが落ち着いた折にはまた子供達が走り回り笑顔あふれる花まつりが戻ってくることを願っています。

さて、お釈迦さんの誕生日ですが、お釈迦さんは生まれてすぐに「七歩」歩まれ天と地を指さし「天上天下唯我独尊」と言われた、という伝承があります。なぜ「七歩」だったのでしょうか。それは六道という迷いの生き方を一歩超えることを表しています。

六道とは6つの迷いの世界で、以下の6つのことです。



地獄道	常に不安と恐れ。孤独の世界
餓鬼道	様々な欲求に振り回され、満足することのない世界
畜生道	本能に生きる世界、流され誰かに依存し続ける自立のない世界
修羅道	私が正しい、間違いはない、と自分の都合に生きる。自分を否定するものに怒り、争い、落ち着くことのない世界
人間道	現実だけではなく、まだ起こってもいないことまで考え苦しむ世界、四苦八苦の世界(生・老・病・死の四苦に、愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五蘊盛苦を足して八苦)
天人道	自分に都合の良い状態のみを受け入れることで苦しみが少ない、それに浮かれ本当に考えなければならないことを考えることがない世界

旧来この六道の教えは、生前の行いによって地獄から天人に向かって上がっていき最終的にはその世界を超えて救われる輪廻転生の様に捉えられてきました。しかし、親鸞聖人は六道の世界を今生の流転とされました。

皆さんにも憶えがないのでしょうか。私たちの日常は、時には全てが上手くいき天人のような時を過ごしていても、時や場所また周りにいる人が代わっただけで簡単に修羅の様に怒り、餓鬼のように欲する世界へと変わってしまいます。一生どころかたった一日の間でさえ私たちは自分の都合・不都合という六道の世界を転がりつづけているのです。

私たちの求める幸せな生活とは何でしょうか。

欲しいものを持ち不都合がなく、誰からも否定されない生活が、私たちの求める幸せになってはいないでしょうか。きっと天人道のような生活を求めているのだと思います。天人の様に生きられれば結構の様にも思えますが、仏教では天人の生活もまた悩み迷いの世界だと教えられます。

私たちは自分ないものばかりを願ってしまいます。もっと頭が良ければいい文章が書けるのにと「法話お手紙」を書いている今も無いものを欲しています。何かを手に入れても自分に無いものを見るとすぐに欲しがります。いつも他人と比べて決して満たされることのない私は、慢性的欲求不満なのです。

親鸞聖人700回忌の法話の中で「私たち人間・世間の中で考え付く最上の世界は天人の世界だ」と言われた先生がいました。世間や私の価値観では六道を超えることはできない、むしろ問題にすらならないかもしれません。どこまでも自己中心的な六道の世界を超えて、自らの本当に求めるものに出遇うことが仏教の課題だと思います。



私たちは鏡を見ることで自分自身の姿を見ることができますが、鏡は私の心の中までは映し出してくれません。私のいのちまでは映し出してはくれません。

そのいのちの鏡こそが、六道を一步超えた浄土なのです。浄土というと死後の世界や眉唾だと思う方もいるかもしれませんが『仏説無量寿経』には、阿弥陀如来は48の願をもって全ての人を救うと誓われた、と説かれています。一番最初に誓われた願いは「たとい我、仏を得んに、

国に地獄・餓鬼・畜生あらば、正覚を取らじ。」です。浄土という国には孤独も慢性的欲求不満もいのちの上下もない、共に生きることのできる国だと誓われています。私は学生の頃に「浄土はいのちのふるさとだ」と言われ、よくわからず理解をしたふりをしていましたが、今はその通りだと思っています。

生きてると本当に色々な事に出会わなくてはなりません。その中で浄土の願いに自分自身の姿を見たとき、六道の中で人を傷つけ、自身のいのちさえも傷つける生き方に痛みを覚えます。本当に私が求めているありかたは六道の世界ではなく、一步出た浄土の世界だと気づかされるのです。

どこまでいっても自我を離れることのできない私を、浄土は呼びかけつづけます。その呼びかけ（念仏）に出遇い、浄土の願い（本願）に出遇い、浄土に生まれることを願って生きる。自身のいのちのありかたが、本当の意味で尊いと言える世界との出遇いによって「天上天下唯我独尊」という、誰とも代わることのできない、代わる必要のない尊いいのちだと知らされるのです。



浄土は常に変わることなく私たちの里帰りを願っています。世間と自分の都合の中で右往左往しながらも、いのちのふるさとを道しるべとして歩むことのできる道が、浄土真宗の仏道だと思うのです。

「出会わなければならない、ただひとりの人がいる。
それは私自身である。」

廣瀬 梶